

令和7年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

学校番号	46	学校名	瑞浪高等学校
------	----	-----	--------

社会的役割等 (スクール・ミッション)	地域や企業等と連携・協働した学びを推進する高校として 地域資源を活用した実践的で体験的な教育活動を通して 地域を支え、未来を切り拓く人材の育成を目指す学校	
学校教育目標 (教育方針)	誠実で、自主的・自立的な人間を育成する 1 誠実な態度を尊び、誠意ある人間関係を築く <規範意識の高揚と自立性の育成・・・責任と役割の自覚> 2 生きる力を育み、一人一人が自己実現を図る <主体的な自己学習力の育成・・・基礎的基本的な学力の定着> 3 健康でたくましい心身と、豊かな人間性を培う <実践を通した健全な心身の育成・・・豊かなコミュニケーション能力の育成力>	
3つの方針 (スクール・ポリシー)	どんな生徒を 育てたいか 【GP】	①自己の目標を実現するために、さまざまな可能性や夢に向かって挑戦し、「未来を切り拓く心」を持った生徒 ②挨拶などの基本的な社会性を身に付けるとともに、自利利他の精神を持って自分と他者を大切にできる、人間性豊かな生徒 ③自らの役割を考え、自らの信念を持って主体的・能動的に行動し、地域や社会に貢献できる生徒
	生徒をどう 育てるか 【CP】	①生徒一人一人の良さや夢を大切にするための多様な科目の開講や少人数授業、瑞高塾等での個々に応じた学びの推進 ※瑞高塾：進学・就職を問わず進路目標実現のために実施する補習や個別学習指導、小論文指導などの総称 ②授業やクラス活動、部活動の中でのコミュニケーション能力や、他者との関わりの中での人間的成長の涵養 ③普通科・生活デザイン科における地域探究やボランティア活動などを通じての、生徒一人一人が活躍できる場の設定と自己有用感の育成
	どんな生徒を 待っているか 【AP】	①「自分の夢」を持ち、それを叶えるための「志」を持った生徒 ②素直で思いやりがあり、「何事にも挑戦する意欲」を持った生徒 ③「人の役に立ちたい」という気持ちを持った生徒
学校の抱える課題	・普通科：目標を高く掲げ進学を目指そうとする生徒が少なく国公立大学進学者が低迷している。生活デザイン科：成績下位生徒の学びの定着が不足している。 ・自己肯定感・自己有用感や目標意識が低いと、向上心をもって学習や部活動、様々な課外活動に意欲的に取り組むことができない生徒が少なからずいる。 ・人間関係を築くことに苦手意識をもつ生徒が多いことに加え発達障害を抱える生徒が年々増加しており、コミュニケーション力を高める指導の必要性が高まっている。 ・母子、父子家庭、あるいは複雑な家庭環境を背景に持つ生徒が増えてきているため、学校での指導だけでは対応できない事案が増えている。 ・瑞浪市唯一の公立高校として、同窓生を中心に本校に対する期待は高いが、私学志向や通信制志向の高まりにより、特に普通科において入学希望者が減少している。	
教育指導の重点	領域・分野	今年度の具体的な重点目標
	進路指導	多様な進路を志望する生徒に対し、一人一人の適性を把握し、より高い自己実現ができる目標を達成させるべく、全職員で連携・統一した進路支援を行う。
	生徒指導	生徒の主体的判断や自己決定を尊重し自己肯定感・自己有用感を育成するとともに、家庭や地域社会、関連する外部機関との連携強化を目指す。
	学習指導	ICT活用や対話重視等の多様なアプローチによる授業改善を進め、生徒の探究心を喚起し、自ら学び続けられる生徒を育成する。
	その他	地域に愛され期待される学校として、普通科の地域探究や生活デザイン科の課題研究で地域連携を進め、将来、地域に貢献できる人材を育成する。

年 度 目 標				年 度 末 評 価 (自 己 評 価)			
領域分野	3つの方針・具体的な重点目標の達成に必要な 具体的取組・方策	県教育振興 基本計画での 位置付け	達成度の判断・判断基準 あるいは評価指標	取組状況・実践内容 評価項目の達成状況等	評価 A. B. C. D	成果と課題	総合 評価 A. B. C. D
進路指導	1年次に職業ガイダンスを新規導入し、3年間を見据えた進路ガイダンスの系統化を図る	施策Ⅱ-13	2年次の進路志望調査の未 定者5%未満	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度と同様の進路支援行事を実施した結果、2年次での進路希望の未定者は1% (1名)であった。 ・2、3年の保護者進路説明会に対して86%が肯定的であった。 ・3年次生の特編クラスでは、岐阜県立看護大学に1名合格した。また、指定校に頼らず一般受験を選択した生徒が2名である。 ・普通科では3年間地域連携PJ(プロジェクト)を実施し、進路実現につながったという評価が多い。 ・生活デザイン科では2年次10月にインターンシップを実施した。普通科は全員でなく希望者のみ2年次3月に実施した。今年度は製造業だけであり、希望者数が少なかったため就職希望者全員に対して実施できなかった。 	B	<p>○行事の内容は適当であり、進路意識も高まった。 △一方で行事の回数が多く、実施時期についても本校のキャリア教育に照らし合わせて、修正が必要であった。</p> <p>△特別編成クラスが2年次から編成することになり、2年次からさらに幅広い大学の知識や経験を身に付ける工夫が必要である。 △体験活動が進路実現につながったという評価は高いが、当事者意識や達成感について実感させる評価方法の工夫が必要である。 △インターンシップは就職を考える生徒には必須である。職種がわかっていないことが課題で、特に普通科では、次年度は希望者に対して全員行えるように工夫したい。</p>	
	進路別講座等の実施を通して特別編成クラスの生徒の意識を高める。	施策Ⅱ-10	対外模試の結果分析および 進路決定先の前年比較				
	地域の大人との交流事業を通した社会人力の育成および 勤労観の醸成	施策Ⅱ-13	諸活動の事後アンケートの 結果分析				
	インターンシップ実施拡大とその事前、事後学習の充実	施策Ⅱ-13	インターンシップ報告書の 分析				
生徒指導	エンカウンター活動、演劇ワークショップ等によるコミュニケーション能力の育成	施策Ⅰ-1	諸活動の事後アンケートの 結果分析	<ul style="list-style-type: none"> ・1年次生を対象に演劇ワークショップ年間3回実施し、コミュニケーション能力の育成を図った。 ・校外での活動機会が増え、ボランティア活動の呼びかけに賛同する生徒が増えた。 ・学校生活への適応に困難を感じた生徒が安心して過ごせる居場所として「ほっとプレイス」を活用した。 ・生徒情報を教員間で共有し、心配な生徒にはスクールカウンセラー(S C)、スクール相談員(S相)などの利用を提案するなどして、学校不適応を予防する努力をした。 ・生徒会を中心に生徒自身が意見や考えを発信できる機会を設けた。その結果、登下校時の体操服着用(夏期限定)が認可された。 	B	<p>○新たな関係を築く機会にはなるが、その場限りになってしまう様子がある。 △校外での活動を通して、自身の役割や責任感、自信を高められるよう呼びかけの工夫が必要である。 ○ほっとプレイスやS C、S相の利用を通して、不登校予防などの一定の成果があった。 △S相の勤務時間が限られており、ほっとプレイスの運用に携わる人手が不足している。結果、保健室利用者が増加し、保健室本来の機能に支障が生じている。 △多くの生徒が生徒会による活動を評価しているが、生徒の判断や決定を尊重する場を設け、自己有用感の育成を図ることが課題である。</p>	B
	M Sリーダーズ活動、ボランティア活動、地域の大人とともに 行う行う活動等による自己有用感の育成	施策Ⅰ-1	諸活動の事後アンケートの 結果分析				
	ほっとプレイスの効果的な活用 (S C、S相の活用含む) により不登校を防止する	施策Ⅰ-3	不登校生徒数、中退者数、 転学者数の経年比較				
	生徒自身が運営する生徒会活動、部活動の充実を図る	施策Ⅰ-1	学校評価アンケート関連項目 の結果分析				
学習指導	公開授業週間を年2回実施し、主体的、対話的で深い学び の視点から授業研究と実践を重ね、授業改善を進める	施策Ⅱ-8	授業アンケートおよび教員 による授業週間の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒向けアンケートでは、授業についてはほぼ例年どおり高評価されている。ICTの有効活用が昨年度より下がった。ネットワーク等の繋がりが悪い教室もあり、均一な環境を望むところである。 ・検定は、特に生活デザイン科において様々なものを受検しており、合格率も例年どおりである。 	B	<p>△年2回、公開授業週間を設け、教員同士があらゆる教科の授業を自由に参観できる機会を設けている。ただ、教員に時間の余裕がないことがあり、多くが最低限の参観にとどまっている。それでも他の教員の授業を見ることで、新たな授業のヒント等が浮かぶことがあり、今後も効果的に運用していきたい。 △高校卒業後の進路に向けた学習を考えると、特に普通科では主体性のない生徒は多いと感じる。自ら大いに興味をもち、より知ろうとするきっかけ(学習や課題)を与えたい。</p>	
	教科を超えてI C T機器を用いた授業についての情報交換会 ・研修会を開催し授業改善を図る	施策Ⅳ-26	生徒による授業アンケート 結果の分析				
	単位制を生かした個別指導、縦断選択による学年を超えた 学び合いの推進を図る	施策Ⅱ-8	生徒による授業アンケート 結果の分析				
	検定へのチャレンジと取得による自己有用感・自己肯定 感の醸成を図る	施策Ⅱ-14	検定の受験者数と合格率の 分析				
その他	地域連携プロジェクトを活用した探究活動の深化	施策Ⅰ-4	諸活動の事後アンケートの 結果分析	<ul style="list-style-type: none"> ・6月に1年次生と中学校の先生による「中学校との交流会」を実施した。事後評価は高く、今後も継続して実施していく予定である。 ・中学生を対象とした体験学習において、3つの専門コースの特色などを知ってもらうため高校生が体験型の授業を行った。 ・通学路清掃や瑞浪駅への座布団の寄付、老人保健施設への慰問訪問などの活動を行った。 ・柔道を継続している生徒の各種大会への出場を支援した。 	B	<p>△交流会は互いに有益だが、参加される中学校が年々減少傾向にある。事後アンケートを参考に、より多くの中学校に参加してもらえよう工夫したい。 ○中学生からは「体験することでバリエーションや説明会では分からない学習内容を知ることができ良かった」との意見が多く、PRの一助になっている。 △以前行っていた中学校への出前講座等の機会を設けることも必要だと思われる。 ○瑞浪駅の座布団設置活動について、地域の方から感謝の言葉を頂き、生徒のモチベーションアップにもつながっている。 ○大会への出場機会を確保し、校外での指導を依頼することで、高いスキルアップを期待できる。</p>	
	中学校との交流活動の充実	施策Ⅳ-20	諸活動の事後アンケートの 結果分析				
	家庭クラブ活動を通じた地域貢献と他世代交流の活発化	施策Ⅰ-4	諸活動の事後アンケートの 結果分析				
	地域のスポーツ団体との連携強化による部活動支援	施策Ⅳ-25	大会結果の考察				

来年度に向けての改善方策等

実施日：令和8年1月8日

<p>(進路指導)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年次から3年次までのキャリア教育方針に基づき、行事の内容と時期を修正する。具体的には、1年次6月にしごとガイダンス、10月に大学見学を行う。また、2年次の大学見学は各自のオープンキャンパスで代替させる。さらに2年次後期より志望理由を考え始め、3年次6月までに具体的な進路先を決定させる流れを作る。 <p>(生徒指導)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒会を中心とし、生徒自らが意見を発信・活動する機会を考えさせ、自己有用感の育成を図る。 ・支援のあり方が多岐にわたり、複雑かつ多様化している。生徒の特性及び課題の理解に努め、不登校等の予防的教育相談の充実を図る。 <p>(学習指導)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来の進路に繋がる学び、生徒自らが主体的に取り組む姿勢づくりの構築。
--

学校関係者評価

実施日：令和8年1月23日

<ul style="list-style-type: none"> ・高等学校におけるコンプライアンスは、「生徒一人ひとりの尊厳を守ること」に直結している。形式的なルール遵守に留まらず、教職員全員が高い倫理観を持ち、「何が最善の教育的配慮か？」を問い続ける姿勢を維持して頂きたい。 ・学校評価アンケートについて、3年次からの評価が高いことから3年次に対してやっていることを下の学年にできれば良い。 ・中学校でもI C Tの活用が広がってきている。現在は逆にアナログの良さを見直す流れもあり、より効果的な方法を考えていく必要がある。 ・I C Tの活用にはA I などを使って楽な方に行ってしまう危険性もあり、正しい使用方法を教えていく必要がある。 ・本校に入りたい生徒の実態を調査する必要がある。 ・中学生はInstagramをよく見ているので、発信は効果的であり、普段の取り組みなどを発信すると良い。 ・地域探究が普通科の強みになっている。
